

中学生が考える

—大口町の一員として
わたしたちにできること—

今回の特集では、大口中学校3年生の社会科の授業を取材させていただきました。

「地方自治」を学びながら、「社会参画」で大口町の一員として地域のために中学生ができることを考えました。

地方自治とは、住民自治

大口中学校3年生の社会科（公民）「地方自治と私たち」で、生徒たちは松江市姉妹都市提携を題材に、未来の大口町を創っていく町の一員として自分なりの社会参画を考えました。

この授業で生徒たちは「地方自治の仕組み」を学び、「地方自治とは何か」「地方自治へ私たちはどう関わっていくべきなのか」という課題へとテーマを広げていきました。

「地方自治とは、地方公共団体（大町など）がおこなう政治活動のこと。まちをよくしていくには住民の意見を聞き、地域に即した課題を解決していく必要があります。行政まかせにするのではなく、住民一人ひとりがまちづくりに関心を持ち、参画していくことが不可欠ですね」と社会科の川地玄記教諭。「住民参加によるまちづくりが地方自治の根本です。住民自身が自分たち自身で課題を見つけ、まちを自分たち自身の手でより良くしていく」という意欲を持つことが大切です」。



「ここで、生徒たちは、大口町のまちづくりの中で、重要なこと、満足(または不満足)なことを考えてみました。「大口町は、自然が豊かで恵まれているね」「企業がたくさんあって、働く場所がたくさんあるし町の税金も多いんじゃないかな」「まちの真ん中を国道41号線や155号線が通っていることもあり交通事故が多いね」「もっと図書館を大きくしてほしいな」など、まちのよいところや解決してほしい課題がたくさん出されました。まずは地域の特色や課題に目を向け、関心をもつことが大切ですね。

地域の課題は地域で解決！

みんな、NPOって知ってるかな？ 正式名称は「非営利組織(Nonprofit Organization)」。営利を目的とせず、地域の課題を自分たちの力で解決するためにさまざまな活動をする住民団体のことです。

大口町は他市町と比べるとまちづくり・NPOなど、団体活動がとても盛んなまちです。生徒は、団体の一覧表を見てびっくり。なんと、人口2万3000人ほどのまちで、まちづくり活動団体数は約70団体もあるんです(平成28年度)。

「この中で、知っている団体や興味を持った団体はある？」と先生。「『もやい』を知っています。海外派遣に行ったOBが作る団体で、自分も今年から参加しています。先輩たちに混じり、やる舞い大祭やふれあいまつりにブース出展しました」「グリーングラウンドパパ」を知っています。小学校の登下校のとき、旗を持って僕たちを守ってくれました」「ヘルシーエイジングの会」を知っています。大口中学校の家庭科クラブの実習で、地産地消の料理を教わっています。また、廃油からつくる石鹸と一緒に作って、毎年ふれあいまつりで販売しています」その他、みなさんが花見にでかける五条川の清掃や桜の保全をする団体や、障がい者福祉や介護、子育てに関する団体もあります。NPOやまちづくり団体は、みなさんの身近で活動していて、知らないうちにお世話になっていたことが分かりましたね。

自立と共助のまちづくり

町は、これからの大口町をどのようなまちにしていけるかを示す総合計画の中で「自立と共助のまちづくり」を定めています。これは住民が主体となり、地域のことは地域で考え解決して

中学生も社会参画！まちのイベントに参加しました！



やろ舞い大祭
給水コーナーでボランティア



やろ舞い大祭でもやいの仲間と



れんげまつりで出展団体のお手伝い



五条川自然塾 タイヤチューブの
浮き輪でボランティア



ヘルシーエイジングの会と廃油石けん作り



体育祭 ボランティア

いくまちづくりの事です。住民と行政、企業が手をとり合って一緒に事業をすすめていくことを「協働」といいます。大口町では、「協働」をとても大切にし、積極的に取り組んでいます。5時限目の授業で取り上げられた「やる舞い大祭」や「ふれあいまつり」は、どちらもまちづくり団体と行政が協働で運営している事業です。

NPO団体を招いて

5時限目は大口町NPO登録団体「やる舞いプロジェクト」の吉田京子さん、同じく大口町NPO登録団体「チームタッシユ」の田中良明さんをゲストティーチャーとして招き、団体活動の『想い』を聞きました。(以下、敬称略)「やる舞いプロジェクト」は、毎年9月に開催される踊りのお祭り「やる舞い大祭」を運営する団体です。

「チームタッシユ」は、ふれあいまつりなどのイベントで登場する大口町のヒーロー、タッシユマンを運営する団体。田中さんは町職員です。タッシユマンの他にも町職員で構成されるダンスチーム「Cafe・de・Oguchi」の総監督兼歌手、兼ダンサーも務めています。「Cafe・de・Oguchi」のダンスは毎年やる舞い大祭で披露されます。どんなダンスなのか、教室でDVDを鑑賞しました。ノリのよいダンスに鳴子踊りのエッセンスを加え、テンポのよい、ちよっとふざけた(?)歌詞の中に、よく聴くと大口町の施策が盛り込まれています。

チーム名のとおり「カフェ」スタイルの衣装をつけた職員に混じり、今年は大口中学校の天野拓夫教頭と、川地先生も参加。筋肉痛に耐えながらの猛特訓の末、見事に踊り切りました！

「Cafe・de・Oguchi」は昨年8月27日の松江だんだ



▲川地玄記先生



▲天野厚史先生

ん夏踊りにも参加し、松江市との交流の一役を買いました。松江市のチーム「南中ソーラン踊り隊絆」も大口町のやる舞い大祭に参加し、お互いに草根での交流ができました。

全力でやるからこそ、楽しい！

お二人に川地先生より質問です。
「活動を長年続けている理由は何？」

吉田さん「踊り終わったみなさんの『楽しかった』『ありがとう』の一言です。」

田中さん「自分がおもしろいと思ったことを他人もおもしろいと思ってくれる、これが最高です。」

お二人とも、人との触れ合いや周りの評価の中に入りがいを感じておられるようですね。人と気持ちを通じ合ったときに生まれる達成感、充実感^{えがた}は、得難く^{とてつ}貴いもの。中学生のみなさんも経験があるんじゃないかな。

最後に、お二人にとって社会参画とは何ですか？
という質問がされました。

吉田さん「1年かけて準備するお祭りは、正直とてもしんどい時もあります。これまで活動を続けてこられたのは、みなさんが喜んでくれるから。そして、若いみなさんが、大人になってから大口町のお祭りとして思い出してくれ



▲昨年のやる舞い大祭

たり、お祭りを見に戻って来てくれたりするだけで、社会参画と言えるんじゃないかな。また準備を頑張ろうという気持ちになれます」。

田中さん「難しく考えず、まずは自分のやりたいことをやってみる事です。楽しくやること、ふざけることとは違います。大変なことでも全力でやった先に本当の楽しさが生まれます。みなさんには、好きなことを常に全力で取り組んでほしい」。

川地先生、「Cafe・de・Oguchi」に参加した感想は？「最初、やってみたらというお話をいただいたときは、よくある鳴子踊りを想像して甘くみていました。実際見てみて、これは、えらいことになったなと！(笑)心打られたのは、リーダーの田中さんの全力さ。同時に、大口町は『大人も全力で楽しむことができるまち』なんだなと。一人ひとりが、ひとつのことを作り上げられることを純粋に楽しんでいる。自分は縁あって参加させてもらいましたが、これは楽しまなきゃ損だなと思いました。この経験が自分にとっては財産です」。

いつでもどこでも全力で真剣に取り組む姿勢は、知らず知らずのうちに周りを巻き込んで、参加する側にも見ている側にも本物の感動を与えてくれますね。お二人の生の声が、実際の「社会参画」を考えるよい題材となりました。

島根県松江市との姉妹都市提携

平成27年7月8日、松江城天守が国宝に指定されました。それを機に、松江城を築



▲松江だんだん夏踊りに参加した Cafe・de・Oguchi



4時限目 6組
課題 姉妹友好都市提携は、大口町に何をもたらすだろうか



3時限目 2組
課題 今後の大口町は、どの分野に予算配分するべきだろうか

城し松江開府の祖とされる大名・堀尾吉晴の生誕地が大口町という縁で、同年8月29日に松江市との姉妹都市提携調印式がおこなわれ盟約書が交わされました。

ところで、そもそも姉妹都市提携って何？「姉妹都市提携とは、親善と交流を目的として、2つの都市が特別に提携することです」と先生。

「親善と交流っていつても、ちょっと大口から離れすぎてない？」「旅行に行かない人にとっては、関係ないんじゃないかなあ」と生徒からもっともな意見。ここで、姉妹都市提携に尽力された松江市役所市民生活相談課長の比田誠さんからのビデオメッセージを見ました。

「人間は、一人では生きていくことはできません。それは『まち』にもあてはまることです。性格の違うまち同士が手を携えると、ひとつではできないような大きなより良い取り組みができます。努力と工夫次第で1+1=3以上のものになります。大口町は産業のまち、松江市は観光のまちという、それぞれがそれぞれにない特徴をもっています。この2つが交流することによって、新しい可能性が広がりますね」。

また、遠いまち同士が友達になると、片方に災害が起こった時に片方が助けられることができるという利点があります。大口町と松江市は直線距離で約350kmも離れているため同時に被災地になることはないのです。いざというときに心強いですね」。

大口町は「自立と共助、協働のまち」を、松江市は「協働から共に創る共創のまち」を、というとてもよく似た施策を掲げています。その点でも、交流することでお互いに発展しあうことができそうです。

す。
最後に、比田さんより生徒のみなさんにメッセージがありました。「今回、堀尾吉晴公のご縁で松江市と姉妹都市提携をしましたが、これをきっかけに大口町の歴史を学び、いつもふるさとのことを胸の中に入れて活躍してくださる」。

中学生が考える社会参画

地方自治の最後の授業は「姉妹都市提携について、自分ができることを大口町広報に投稿しよう」です。生徒たちは授業で学び、感じたことを広報おおくちに投稿しました。

松野尾 航生

大口町と松江市のつながりでできること。それは、互いの文化、生活を他の地域よりも強くPRができるということだと思います。大口町の人たちは松江市を、松江市の人たちは大口町のことを詳しく知り、松江市でPRすれば、人が集まりまちの発展、成長につながると思います。そして悪い点だけでなく、良い点も取り入れることでより大きなまちの成長へとつながり、互いに尊重し共生していくような関係ができると思います。だから僕は互いの町をもっとPRすることを提案します。僕たちができる社会参画は、松江市のことを知ること。これが一番重要だと思います。松江市のため、自分の町の発展のために、少しでも多く松江市のことを知り、身近な人に伝え、自分からPRをすることが、僕たちができる社会参画だと思います。



5時限目
3組

課題 社会参画ってなんだろう



6時限目
1組

課題 姉妹都市提携について、自分ができることを大口町広報に投稿しよう

佐藤 怜

大口町では松江展、松江市では大口展をして、互いの文化を交流したり、そのまちの企業やNPOをまねいて交流したら、さらに発達したまちになれると思います。また、その交流を利用して、コラボ商品をつくってみるのがいいと思います。また、互いの小中学校で交流をして、何かを協力して作って展示してみたり互いの校風を紹介してみるのいいと思います。

私は、この社会の授業を通して、自分にもまちを変えることができるのだと知りました。また、それを通して松江市に呼びかけたり、取り入れたりできたらいいなと思いました。

鈴木 亮介

姉妹都市提携を結んでから1年以上経過していますが、僕を含む多くの町民が松江市のことをよく知りません。その原因は、大口町と松江市の距離が離れていることにあると思います。物理的な距離はもちろん、互いの心の距離も、近づきづらくなっています。

そこで、僕が必要だと考えたのは、インターネットによる互いの交流です。誰でも参加できるような場を設けることができれば、相手の市や町へ長い時間をかけて向かわずとも、コミュニケーションができます。また、ちょっとした文化の違いから、思わぬ方向に物事が進展することがあるかもしれません。

以上のことから、僕が姉妹都市提携に参画することには、双方の心の距離を近づける、交流の手段が必要と思いました。

木村 成美

お互いの土地の歴史や地理の授業をしたり、特産物などを給食に出したりするのいいと思います。日常的にそういう繋がりを意識して持っていれば、もっと親密になれ、松江に興味を持った人が実際に訪れたりして観光業も栄えると思います。

私は城や社寺などの建築物を見るのが好きなので、松江城を見に行ったりして姉妹都市提携に参画したいと思います。

鈴木 音緒

松江市の中学生と大町町の中学生が交流する場ができるのいいと思います。松江市の中学生がどう思っているか知りたいし、私たちの年代が松江市との関係をより良くしていくために社会をつくっていくかなければいけないから、会えなくても手紙とかで交流できるのいいと思います。

下田 佳凜

自分の町のとっておきのものをお互いに交換すべきだと思えます。大町町は小さな町ですが産業は他の大きな地域に負けないくらい盛んです。そして松江市にも、たくさん美味しい食べ物などがあることが分かったので、ぜひ自分で見て食べてみたいなと思います。(災害時の)物資の調達だけでなく、一番は実際に足を運ぶことです。行ってみることで自分の町にはないものを感じとられよい影響をお互いに与え合えると思うんです。大町町は桜が有名で自慢できるほどです。松江市のみなさんにぜひ見に来てほしいです。



取材にて

今回の特集で、授業に何度か足を運ばせていただきましたが、受験勉強に追われる毎日を過ごしているであろう中学3年生のみなさんが、大町町の現在と未来、そして自分自身の地域への関わり方を真剣に考えられている姿を見て、頼もしさを感じると同時に、大人にはない発想の柔軟性に触れられて新鮮な気持ちになりました。

やはり社会は、大人と子ども、男と女、いろいろな考え方や生き方をしている人がいるからおもしろいし、一緒に協力すると可能性が無限に広がっていく。これこそが「社会参画」の意義でもあるし、必要性でもあると改めて考えさせられました。

最後に、まもなく義務教育を終え、人生という大海原に漕ぎ出していく中学3年生のみなさんに、川地先生からの心をこめたメッセージを贈ります。

「社会人になって大町町内に留まるつもりであれば、大町町から離れていくつもりだと思います。どんな未来を選んだとしても、『ふるさととは?』ときかれたときに胸をはって『大町町です』と言えるようなまちとの関わりをもち続けてほしいです。」

「ふるさと」とは、航海中の船にとっての灯台のようなもの。いつでも心に想う「ふるさと」を持っていれば、この先さまざまな風雨や、時には嵐に見舞われてもはね返して乗り越えていく強い心のよりどころとなるでしょう。無限の可能性を秘めた大町中学校3年生のみなさん、ぜひ、先生のメッセージを心の片隅において、大志を持って自分で選んだ道を進んでいくことを。